



Title	倫理の読解から構造の把握へ : 夏目漱石『心』研究史論
Author(s)	徳永, 光展
Citation	阪大近代文学研究. 2004, 2, p. 52-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92625
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

倫理の読解から構造の把握へ

—夏目漱石『心』研究史論—

徳永 光展

一 本稿の視点

本稿は夏目漱石『心』に関する研究論文を時系列的に跡付け、研究史論として構築する。作品論として質量共に傑出する『心』研究の状況を考察すれば、そのまま日本近代文学専門分野における研究方法の推移に関する理解が深まるという考え方に基づき、以下に展開する議論に学術的意義を見出すものである。

研究史論の試みや研究概要の記述に関する先例は既に蓄積されてきている。その中で最も本格的なのは仲秀和によるものだが、その達成からは同時に研究史記述の困難も如実に理解される^①。坂敏弘は「仲秀和の一連の「こゝろ」研究史は、先行研究の紹介に終始し、必ずしも研究史になりえていない」^②というが、そうした批判に耳を傾けつつも、研究の精緻化が急激に進む中では研究史記述に際する力点の確定に困難が増し、概要紹介にならざるを得ない状況が生じることをまず認識しておかねばなるまい。

齊藤恵子は研究史の論点を思い切つて単純化し、「先生」即漱石と見る小宮豊隆^③（小宮豊隆）、「こゝろ」と聖書^④（滝沢克己）、「神話打破・文体と形式への評価」^⑤（江藤淳、牧野律子、大澤吉博）、「ドッペルゲンゲルと同性愛と」^⑥（北垣隆一、土居健郎、大岡昇平）、「ポオと漱石——比較文学の立場から」^⑦（池田美紀子、柄谷行人、デニス・グラフィン）、「文明史・社会学の視点」^⑧（山崎正和、加賀乙彦、作田啓二）、「こゝろ」と「オイテイプス王」^⑨（清水孝純、坂口曜子、鶴田欣也）、「作者の死」^⑩（テクストの誕生）^⑪（蓮實重彦、小森陽一、三好行雄、石原千秋、桶谷秀昭）、「書かれざる部分を読む」^⑫（パトリシア・メリヴェイル）、「こゝろ」の英訳について^⑬（エドウィン・マックレラン）という項目に分類した^⑭が、厳しい選択を迫られた結果のまとめであることは言うまでもない。

研究史を一個人の研究者によって書き切ることが著しく困難になる中で『心』論のアンソロジーが一九九〇年代になつて出現する^⑮。また、『心』をめぐる討論会の模様なども活

字化され⁽⁵⁾、研究状況を把握するための文献も多彩になりつつある。海外でもシンポジウムが持たれるなど⁽⁶⁾、研究状況は活況を呈して現在に至っていると言える。

このように『心』受容に関する研究は着実に進展してきているが、本稿では『心』研究史に関する論考にも依拠しつつ、作品受容の実態を同時代批評から戦後の作品論、さらには近年のテクスト論に至る研究を視野に入れて概観し、注目される人物の変化、作品受容に対する態度の推移、書かれていない情報の扱いを巡る立場といった点を中心に、それぞれについて論じた代表的論考を重点的に紹介し、研究史の問題点を改めて浮上させようとするものである。

二 同時代批評から戦前・戦後にかけての論調

佐藤泰正によれば、大正三年、朝日新聞への『心』連載が完結した際に各新聞紙上に出た批評・紹介は「すべてが心理分析の細緻を言い、作風の熟達の一頂点をここにみるといふ」⁽⁷⁾類のものであり、小宮豊隆の「学識ある、誠実な、倫理的意識の鋭敏な、一人の紳士が、自分に背負された過去の因果のために、人生に対する態度を如何に把持すべく余儀なくされたか、そうしてその背負された因果とは何う云うものであるか、夫を書こうとしたのが此『心』である。」⁽⁸⁾という姿勢を評して『こころ』という作品もまた、即天去私に至る漱石の精神史という全円の裡に整序され、主題の微妙な亀

裂も、不透明さも、ついに一片の疑義の対象とすらなりえてはいない。⁽⁹⁾という。斎藤恵子も「小宮豊隆の『こころ』論（『漱石の芸術』一九四二）は、直弟子による漱石文学像の代表的なもので、下「先生と遺書」を最重要視した倫理的な人格主義的な『こころ』論の一つの典型である。」⁽¹⁰⁾と位置付けるが、その他の戦前の研究も究極的には先生の倫理的評価論であり⁽¹¹⁾、「戦後の漱石研究が、この『即天去私』神話」に封じ込められた漱石像の解放を機軸としたことは必然」⁽¹²⁾で、「従来の言わば漱石精神史の叙述を主眼とする論に対して、ようやく精密な作品論による漱石世界の再検討が試みられてゆく。」⁽¹³⁾との評価を下す。つまり、戦後になり、人間・夏目漱石と個人的な親交を持たなかった世代に研究の主導がわたされた時、客観的に作品を読もうとする傾向が生まれていったと解釈されているのである。戦後の『心』論の方向性は小宮豊隆の論からいかにして自由になるかという点にあったといえる⁽¹⁴⁾が、藤井淑禎は安倍能成の例を挙げながら、読者が作中人物に実在の人物を想定しなければ承知しない傾向が同時代読者に共有されていた読み方だったと見る⁽¹⁵⁾。漱石に最も愛されていた門下生を小宮豊隆と断言する森田草平⁽¹⁶⁾は「私」を小宮豊隆と考える⁽¹⁷⁾が、先生を漱石と見る読み方が支配的だった様子は「先生と漱石」というまでもなく、同一の人物であるわけではない。だが、多くの漱石研究家の常套の手段にならつて、そこに漱石自身のトルソをつくつてゆくことは、わたくしにも許されてよいである

う。(18) という猪野謙二の言及にも窺えるのである。

この戦後初の『心』論は「先の門下評を再検討させる発端となる。(19) 意義を持った点において画期的ではあつたものの、「やはり主人公である先生像に対する論及が多く、未だ全体の精緻な分析には至っていない。」(20) と言わざるを得ず(21)、門弟による漱石論の延長にあつたことは否めない。その傾向の変化は「心」で、漱石は、「我欲」のぶよぶよと浮遊している、平面的人間関係の世界での愛の不可能性を、ほとんど古典的な厳正さで描いた。(22) と論じる江藤淳を待たなければならなかつた。江藤の漱石論が「従来の〈漱石神話〉(則天去私神話)なるものを否定し、漱石内面の〈低音部〉とも〈深淵〉ともいふべき深部に迫らんとした、画期の論」(23)で、ようやく「漱石は過去の、理想化の呪縛から解放され、作品の読み方も作家中心、人生論的・倫理的に偏りがちだつたのが、その文学性、美的・芸術的側面に関心が寄せられるようになった。」(24)のである。

しかしながら、畑有三による同時代批評から一九六〇年代前半までの研究史記述を概観する限り、追求されている問題が一貫して先生の評価論であり、その生き方に対する倫理的意味付けにあることは否めず、また、先生の価値評価がそのまま漱石の哲学・思想を論じることにつながるといった雰囲気も強く、作家・作品研究が渾然一体となつて認識されている状況をも窺わせる(25)。その意味では、「昭和三十年代の研究は、未だ詳しい作品分析の時代に入らない。四十年代に

入つて作品論は一斉に花開く、と言つても過言ではない。」(26) という見解が生じるのは当然と言える。

三 先生論からの脱皮

「先生と私」や「両親と私」の章を、主題的な追求の稀薄な、「先生の遺書」への単なる導入の役割を果しているだけのもの(27)と位置付ける見方は長く支配的であつたが、先生論から、その他の登場人物へと議論が拡大し、先生が相対化されていく様子をはつきり確認できるのは一九六〇年代になつてからで(28)、石崎等は論の中心人物の移行を根拠に戦後から一九七〇年代までを三期に分けて概括する(29)。猪野謙二(30)を戦後の『心』研究の出発とし(31)、先生の評価論を主軸に作品論が展開した時期を第一期とすれば(32)、玉井敬之(33)が「小説構成の点から「ヤンガー・ジェネレーション」のシンボリックな形象」を「私」にみ、その「私」をしつかり押えることの重要性を提示した。(34)のを機に「先生の恋愛における罪と罰、という視点を離れ、小説構成が重視され先生と「私」との関係の考察が深まつた」(35)として第二期が到来したとする。第三期は「前の段階で「私」が重視されたのに代わつて、ここではKの存在が注目されてきている。」(36)時期で越智治雄(37)以降としている。

佐藤裕子も「私」の発見を研究史における転機と見、一九五九年から六〇年代半ばの玉井敬之(38)、三浦泰生(39)、畑

有三⁽⁴⁰⁾、越智治雄⁽⁴¹⁾の論を「それ以前の『漱石山房』に出入りしていた人々の論が、必ずといっていいほど作中の主要人物である『先生』と作者漱石とを重ねて作品を読む傾向があったのに対して、作品そのものから読み取ることのできるもの、すなわちここでは『私』を問題にするという態度を貫いている」⁽⁴²⁾として重視する。一方、浅野洋の「私」が気になりながら、「私」に十分注目しながら、どこかテクストの外に出ることに一種禁欲的⁽⁴³⁾との指摘を受けた玉井敬之は自らの論文の歴史的位置を冷静に踏まえながら「私」のドラマが見え、具体的にイメージすることを可能にしたという意味で画期的なのは一九八五年の小森陽一⁽⁴⁴⁾、石原千秋⁽⁴⁵⁾の論であると総括している⁽⁴⁶⁾。

一九六〇年前後から一九八〇年代に至る約二〇年の研究における「私」論の様相を秋山公男は「①『彼岸過迄』の敬太郎、『行人』の二郎の系譜（聞き手乃至語り手）に属し、かつ両者の成長・発展した存在。②『先生』とその精神世界を共有した、いわば精神的同類とでもいうべき存在。③『先生』の未来が託された、次代に生きる青年としての存在。」⁽⁴⁷⁾に分類した上で、「①『私』は敬太郎や二郎の成長した存在とはいえず、この二者に比べてさえ固有の世界を喪失しており、人物形象が不明確である。『先生』との密着性にしても追従者としての近さであって、『先生』の言動の解説・代弁に終始している。②『先生』と精神的同族どころではなく、無知・未経験であることが青年『私』の前提であって、『先生』

とは対極に位置付けられている。③『先生』の「不信」を越えるに足る相対的視点を有せず、精神の強韌さや自律性に乏しい。よって無批判に『先生』の思想に共鳴し是認するのみであり、伏線の敷設・紹介が主たる役割である。」⁽⁴⁸⁾との見解を表明するが、「私」を冷静に相対化するこの視点はやがて生じる作品全体の読み替えを予感させるものである。

昭和四〇年代（一九六五〜一九七四）になると作品論が続出する。鳥井正晴は「研究は一挙に精緻となり、旧説の検討の上に、『作品』の読みが問われる。」⁽⁴⁹⁾とし、越智治雄⁽⁵⁰⁾と佐藤泰正⁽⁵¹⁾を代表的作品論者として挙げるが、仲秀和もこの時期の達成を「漱石研究が、近代文芸研究を象徴、代表、集約するような観すら呈するのである。研究の方法、視点、領域は多岐にわたり、すぐれた研究がこの時期一気に輩出」⁽⁵²⁾し、「『ころ』研究も、印象批評の域から急激に精緻になり、作品の人物論、構成構造論、キーワードの解釈など、トータルに分析してゆこうとする志向が顕著になる。」⁽⁵³⁾として高く評価している。

四 テクスト論を巡る評価

「四十年代における作品論の成熟は、存在論的な視角の深まりとともに作品構成、技法、文体、語りの方法などをめぐって細密な深まりをみせるが、やがてまたひとつの転換が来る。すでにあった構造主義やテクスト論、記号論などの昂

まりとともに、漱石研究にもまた新たな風が吹いて来る。」⁽⁵⁴⁾と佐藤泰正が述懐する雰囲気の中で、現在の『心』研究に今なお強い影響を及ぼしている小森陽一⁽⁵⁵⁾、石原千秋⁽⁵⁶⁾による論文が一九八五年に発表された。木股知史の要約に従えば、小森陽一の論は、「私」の手記に、遺書の言葉を差異化するはたらきをみとめ、死を絶対化する倫理主義を相対化すること。「私」の手記の空白の時間に、「奥さん」——と共に「生きる」という選択を想定したこと。「過去の「先生」と「遺書」を書く時点で「先生」、「遺書」を読むまでの過去の「私」と手記を書いている「私」、そして読者の「私」という時間の重層性を指摘したこと」を特色とし、石原論の特徴は、「先生」と「私」の間に葛藤を見出し、これまで注目されてきた「御嬢さん」の「策略家」としての面を「オイディプス・コンプレックスの性的な層」として定位した。」⁽⁵⁷⁾点に見出される。その後の被引用回数において両論文は群を抜いており、研究史においてもターニングポイントを作ったといつてよい⁽⁵⁸⁾。この両論文を貫く共通点を当事者の一人である石原千秋は「まず、①いずれも冒頭部に注目し、青年（とりあえずこう呼んでおく）が先生を批判、あるいは先生の遺書の書き方を差異化していると読むところにある。『余所々々しい頭文字杯はとも使ふ気にならない』という一節が、先生こそが親友をKという『余所々々しい頭文字』で呼んだ人間だったことを暴いてしまうことに、重い意味を見出したのである。次に②それまであまり論じられること

のなかった青年と静について言及したことである。石原は、青年が先生を心的にのり超えて静と結ばれる物語を暗示し、小森は、青年は『奥さん』——と共に「生きること」を選んだとする。そして、③先生の「遺書」は、まさにそのために公表される（あるいは、公表するためにいま手記を書いている）と考えたことである。」⁽⁵⁹⁾とし、「テキストの細部を重視したこと、そして、書いてあることと書いてないこととの境界を、読むという行為によって押し広げた」「方法的な挑戦も波紋を投げかけ」、「何が書かれたことで何が書かれなかったことか。あるいは、何がテキストか。テキストの空白とは何か。こうした疑問を投げかけた一連の論考を、方法への批判」⁽⁶⁰⁾と位置付けている。

この論が登場した一九八〇年代半ば以降、テキストの読み方をめぐって、秦恒平⁽⁶¹⁾、小森陽一⁽⁶²⁾、石原千秋⁽⁶³⁾と三好行雄⁽⁶⁴⁾との間で「こゝろ」は「私」の「手記」であった、その「手記」の中で「先生の遺書」を引用している、そしてそれを公表している、それはまさに「私」の「先生」に対する背信にほかならないという、そのあたりをめぐって論争が繰り広げられた。つまりテキスト論的に「虚構言語」（石原氏「制度としての『研究文体』」「日本近代文学」37、昭62・10）の中に閉じ籠って引用、公表、背信という結論を導き出す立場がある一方で、『こゝろ』というのは「先生」||漱石であり、漱石と現実の若い読者とが向い合う親密な場みたいなものを前提として書かれ読まれた作品じゃないかという

立場もありうる。」⁽⁶⁵⁾ことが問題にされた。それ以降の研究は『心』論そのものにせよ、或いは『心』研究史の記述にせよ、この議論を無視し得ない。紅野謙介は「語り手「私」のテキスト（手記）が先生のテキスト（遺書）を差異化する語りの構造に注目、そうした言説の指し示す帰結として（私／奥さん）のドラマを喚起し、先生の遺書を基軸とする従来からの読みを大きく揺さぶった」⁽⁶⁶⁾小森陽一の論文を評して「こゝろ」論のすぐれた達成は、上中下という三部構成のなかで「先生の遺書」だけが特権的に読まれて行く享受のあり方に對し、上中が下を差異化する表現を発掘し、そこに「私」の「先生」と異なる生き方を選択していく批評性を読み取ったことにある。」⁽⁶⁷⁾と高く評価した⁽⁶⁸⁾。

しかし、その反響の中で提出された批判や評価の数々⁽⁶⁹⁾は作品を読むという行為を巡つての本質的な問題を孕んでいた⁽⁷⁰⁾。小林和子は小森陽一の論文に對して、「実際には書かれなかった作品の内容を云々するのは論者の想像力の一人歩きであり、それがもとの作品の新しい読み還元されない限りは、「作品読解作業からの逸脱行為」という批判をうけるのは当然である。」⁽⁷¹⁾が、同時に「そのような危険を犯さざるをえない」「こゝろ」研究の困難さを痛感したのも事実であった⁽⁷²⁾という。一方、浅野洋は「同じ作品への読みがなぜこゝろも大きく隔たるのか。思うに、この隔たりは単に作品に對する読みの深淺や正誤によつて生じた結果ではない。それは、そもそも『こゝろ』という作品自体、そのような異

なる見解を生じやすい、イメージの反転や多義的な解釈を伴う振幅の大きい言説によつて形成されたテキストだったからではなからうか。」⁽⁷³⁾との見解を示し、「いわば、「私」の語る（引用する）ことばだけが、読者にとつて唯一すべての手掛かりなのだ、奇妙なことに、「私」の語る光景は必ずしも鮮明ではない。」⁽⁷⁴⁾点にも根拠を求めつつ、「こゝろ」の「曖昧さ」は、「先生の遺書」（下）でも同様だ。」⁽⁷⁵⁾「換言すれば、そうした「曖昧さ」多義性」にこそ『こゝろ』というテキストの本質がある。」⁽⁷⁶⁾との見解に立つ。

また、羽鳥徹哉は小森陽一による一連の『心』論⁽⁷⁷⁾を総括して「小森氏は「作品」の実在を認めず、読者の読みによつて作品はその時々姿を変えろと思ひ込んでゐる為、作品の言葉全体から考へるのでなく、作品の中の一部の言葉を捕えて、おもに自分の空想のみ膨らませるような読み方をするのでないだろうか。また、漱石的倫理を批判しようと思つたらいくら批判しても構わない。しかしその倫理を素直に読み取る前に、なぜ元の作品とは似つかぬものに作品を「読み変える」ようなことをするのであるか。」⁽⁷⁸⁾との疑問を呈した上で⁽⁷⁹⁾、「先生」の死後、「私」は、「奥さん」——と——共に——生きることを選ぶとする」読み方が果たして成立するかどうかを検証する⁽⁸⁰⁾。また、古賀康人は書かれていない物語を読む可能性を考え、「続こゝろ」の提案を行っている⁽⁸¹⁾。

一方で、小森陽一、石原千秋自身も論議を総括しようとして

した⁽⁸²⁾が、同時に細部の辻褃合わせに過度に拘る読み方に疑義を呈する浅田隆⁽⁸³⁾、西垣勤⁽⁸⁴⁾に石原千秋は反論し、再度議論を巻き起こしてもいる⁽⁸⁵⁾。浅田隆との間では論争になったが⁽⁸⁶⁾、時代と共に精緻化する研究状況の中で部分の読みと全体の読みをどう整合させるかという根本の問題は依然として残されている。石井和夫はこの論争を「両氏の論は、かつての「こゝろ」論争の余波だが、焦点は、開かれた読みとは何かとの問いかけと、論の前提は作品の構造を読む事にあるとする主張の応酬にある。一方、小森氏は既に「漱石」の小説が、通説から私の誤読までを可能にする、対極に引き裂かれつつ、その両極の間でゆらぐような構造と言葉の運動を内包している」(『漱石を読みなおす』平成7・6 筑摩書房)と収束し、自己の読みを相対化する地点に移行している⁽⁸⁷⁾と総括している⁽⁸⁸⁾。

斉藤英雄は小森陽一と石原千秋の論文が発表された後の論争を秦恒平⁽⁸⁹⁾、三好行雄⁽⁹⁰⁾、大川公一⁽⁹¹⁾、田中実⁽⁹²⁾を挙げて紹介し、高田知波⁽⁹³⁾については「私」の手記に直接話法が、「先生」の手紙(遺書)に間接話法が多く使われていることに注目、『こゝろ』の表現構造について考察している⁽⁹⁴⁾と紹介する。また、押野武志の論文⁽⁹⁴⁾を本格的な静論の登場として評価する⁽⁹⁵⁾。

先生の倫理論から「私」の背信論へ、そのような読み替えをも許す懐を作品が持つなら、他の登場人物に焦点をあてた論の出現は、作品分析の一層の深化・緻密化を暗示させる。

しかし、先生や「私」についての読みの可能性が既に開拓され尽くした結果として、例えば押野武志の静論が登場したと理解するならば、『心』を論じる限界も見えてきたことになる。その予感を嗅ぎ取った石原千秋は言う。「小森陽一や私が一九八五年に行った問題提起の唯一の共通点は、書き手の「私」という「死角」を「明るみ」に出したことにあった。小森は、「私」の手記の言葉を「先生」の遺書の言葉と差異的にかかわらせることを試みていたし、私は「こゝろ」を「私」と「先生」との葛藤の劇と読もうとしていた。これが人物論でなかったとは言い切れないが、単純に人物論だと受けとめられた時、その後の展開はほぼ決まったと言える⁽⁹⁶⁾。「書かれた分量が少ない人物に二項対立の問いを仕掛けて行くことになるのである。「先生と私」の章における「先生」は、「私」にシンパシーを感じていたか、否か。「K」は恋のために自殺したか、否か。そして、静に声はあるか、否か。そろそろ、「奥さん」論が出て来るのではないかと思うと、憂鬱である。人物論に関する限り、「こゝろ」論の終焉は近い⁽⁹⁷⁾と。事実、この発言の直後に「奥さん」論は赤間亜生によって書かれるのである⁽⁹⁸⁾。

五 結語

作品の何に留意するかに着目した際、中心から周縁に向けて論じる対象が拡散してきている状況をまず確認することが

できた。先生を中心とする読みから「私」に着目する読みへの移行は先生が拘る倫理に関する議論から作品の全体構造の把握へと読解に対する論者の態度を誘っていくことにもなる。その意味では倫理的価値を汲み取る読みから構造を考察する読みへの変化が生じるのは研究の精緻化に伴う歴史的必要であったと位置付けることができる。また、静やその母への着目には男性の手による作品から女性の声を取り出そうとする意図がうかがえ、作品の読み替えに資するものである。

漱石は朝日新聞入社以降、作品を新聞小説として発表した。新聞連載で既発表部分を書き直せない条件下では構成に破綻が生じる限界を常に抱えていたのである。だから、構造に関する議論にも限界が生じてくる。倫理的価値、作品構造、各登場人物に関する議論が出揃ったように見える『心』論の過去は作品論の発展段階を理解する上で、この上もない例を示していると言える。

では、『心』論の未来はいかに展望し得るのであろうか。これまでの議論の達成と限界を見据え、総合的な議論をしていく中に新たな議論は見出されるに違いない。

注

- (1) 仲秀和「漱石『こゝろ』研究(一)——問題の所在と同時代批評・戦前の研究を巡って——」(『日本文芸研究』第三六巻第一号
関西学院大学日本文学会 一九八四・三三)、仲秀和「漱石『こゝろ』研究(二)——昭和二十年代・三十年代の研究を巡って——」(『日本文芸研究』第三六巻第三号 関西学院大学日本文学会 一九八四・九)、仲秀和「漱石『こゝろ』研究(三)——昭和四十年代の研究を巡って——」(『日本文芸研究』第三七巻第四号 関西学院大学日本文学会 一九八六・一)、仲秀和「漱石『こゝろ』研究(四)——昭和四十年代の研究を巡って(2)——」(前田妙子編『日本文芸の形象』和泉書院 一九八七・五)、仲秀和「漱石『こゝろ』研究史(五)——昭和五十年代以降の研究を巡って(1)——」(『文化研究』第二号 樟蔭女子短期大学 一九八八・六)、仲秀和「漱石『こゝろ』研究史(六)——昭和五十年代以降の研究を巡って(2)——」(『文化研究』第三号 樟蔭女子短期大学 一九八九・六)、仲秀和「漱石『こゝろ』研究史(七)——昭和六十年代以降の研究を巡って(1)——」(『文化研究』第八号 樟蔭女子短期大学 一九九四・九)

- (2) 坂敏弘「『こゝろ』研究の現状・素描」(『解釈』第四七三号 解釈学会 一九九四・八 八頁)
- (3) 斉藤恵子「『こゝろ』は日本でどのように読まれてきたか」(平川祐弘、鶴田欣也編『漱石の『こゝろ』』 どう読むか、どう読まれてきたか』新曜社 一九九二・一一 三〇九〜三三九頁)
- (4) 玉井敬之、藤井淑禎編『漱石作品論集成 第一〇巻 こゝろ』(桜楓社 一九九一・四)は同時代批評から一九八〇年代までの主要論文を網羅的に収録している。一方、猪熊雄治編『夏目漱石『こゝろ』作品論集 近代文学作品論集成③』(クレス出版 二〇〇一・四)は重複を避ける意味で一九九〇年代の論文を

中心に採録する。研究誌の『心』特集には「季刊文学」第三卷第四号(岩波書店 一九九二・一〇)、「漱石研究」第六号(翰林書房 一九九六・五)、「日本近代文学」第六二集(日本近代文学会 二〇〇〇・五)、「江古田文学」第五二号(江古田文学会 二〇〇三・二)などがある。

- (5) 佐藤泰正、谷沢永一、浅田隆、玉井敬之(「シンポジウム」『ころ』をめぐって)、「国文学 解釈と鑑賞」第四七卷第一二号 至文堂 一九八二・一一)、小菅健一、畑中基紀、東典幸、和田敦彦、榎本隆之、高見研一、原仁司、十重田雄一、篠崎美生子、佐々木雅彦「討論・『ころ』ってなあに」(『續』第四号 早稲田大学大学院文学研究科榎本・佐々木ゼミ 一九九一・一一)、石原千秋、小森陽一「《対談》漱石『ころ』の原稿を読む」(『季刊文学』第三卷第四号 岩波書店 一九九二・一〇)、小森陽一、中村三春、宮川健郎編『総力討論 漱石の『ころ』』(翰林書房 一九九四・一)、小森陽一、石原千秋編『漱石を語る2』(翰林書房 一九九八・一二)、倉本幸弘、小高裕樹、土佐秀理、中島一夫「夏目漱石『ころ』をめぐって」(『早稲田実業学校研究紀要』第三三号 早稲田大学系属早稲田実業学校 一九九二・三)など。
- (6) Lin, Lien-hsiang (ed.), *A Symposium on Natsume Soseki's Kokoro*, National University of Singapore, Singapore, 1994.
- (7) 佐藤泰正「漱石研究史論・素描——『ころ』を軸として」(『佐藤泰正著作集』② 漱石以後Ⅱ』翰林書房 二〇〇一・六 二〇六頁)

(8) 小宮豊隆「漱石先生の『心』を読んで」、引用は、江藤淳、吉田精一編『夏目漱石全集 別巻 漱石文学案内』(角川書店 一九七五・二 四三三頁)による。

(9) 佐藤泰正「夏目漱石論」(筑摩書房 一九八六・一一 三二七頁)

(10) 注(3) 三二三頁

(11) 注(9) 三二七～三二一頁

(12) 注(9) 三二一頁

(13) 注(9) 三二二頁

(14) 同時代批評及び戦前の研究は仲秀和「漱石『ころ』研究(一)——問題の所在と同時代批評・戦前の研究を巡って——」(『日本文芸研究』第三六卷第一号 関西学院大学日本文学会 一九八四・三 四三三～四五三頁)で概観できる。

(15) 玉井敬之、藤井淑禎、浅野洋(司会)「鼎談」(玉井敬之、藤井淑禎編『漱石作品論集成 第一〇巻 ころ』桜楓社 一九九一・四 三五三～三五四頁)

(16) 森田草平「夏目漱石」(筑摩書房 一九六七・八 一一〇～一一四頁)

(17) 注(3) 三二三～三二四頁

(18) 猪野謙二「『心』における自我の問題」引用は、玉井敬之、藤井淑禎編『漱石作品論集成 第一〇巻 ころ』(桜楓社 一九九一・四 四三三頁)による。

(19) 鳥井正晴「『ころ』をどう評価するか・『ころ』評価史」(『国文学 解釈と教材の研究』第二六卷第一三号 学燈社 一

九八一・一〇 一〇八頁)

- (20) 仲秀和「漱石『こころ』研究(二)——昭和二十年代・三十年代の研究を巡って——」(『日本文芸研究』第三六卷第三号 関西学院大学日本文学会 一九八四・九 六五頁)
- (21) 注(15)の「鼎談」で浅野洋は「先生の遺書」のポイントを絞って見ていくという、最後の典型的な『こころ』論(三一六一頁)という評価を下している。
- (22) 江藤淳『夏目漱石』(東京ライフ社 一九五六・一一 一四〇～一四一頁)
- (23) 注(7) 二二二頁
- (24) 注(3) 三二六頁
- (25) 畑有三「心」(『国文学 解釈と鑑賞』第二九卷第三号 至文堂 一九六四・三 八六～九二頁)
- (26) 注(20) 六八頁
- (27) 片岡良一『夏目漱石の作品』(厚文社 一九六二・三 二一七頁)
- (28) 注(19)は「昭和四十年代、全体のみならず部分への注視もその特色である。」(二二一頁)として「私」、「K」、「静」への評価に言及する。
- (29) 石崎等「こころ」(竹盛天雄編「別冊国文学5 夏目漱石必携」学燈社 一九八〇・二 一八二～一八五頁)
- (30) 注(18)に同じ
- (31) 注(29) 一八二頁
- (32) 注(29) 一八二～一八三頁
- (33) 玉井敬之『『こころ』をめぐって』(『日本文学』第八卷第三号 日本文学協会 一九五九・三)
- (34) 注(29) 一八三頁
- (35) 注(29) 一八四頁
- (36) 注(35)に同じ
- (37) 越智治雄『漱石私論』(角川書店 一九七一・六 二四八～三〇二頁)
- (38) 注(33)に同じ
- (39) 三浦泰生「漱石の「心」における一つの問題」(『日本文学』第二三卷第五号 日本文学協会 一九六四・五)
- (40) 畑有三「心」(『国文学 解釈と教材の研究』第一〇卷第一〇号 学燈社 一九六五・八)
- (41) 注(37)に同じ
- (42) 佐藤裕子『漱石解説——語り』の構造」(和泉書院 二〇〇〇・五 二二八頁)
- (43) 注(15) 三六二頁
- (44) 小森陽一『『こころ』を生成する『心臓』』(『成城国文学』創刊号 成城国文学会 一九八五・三)
- (45) 石原千秋『『こころ』のオイディプス——反転する語り——』(『成城国文学』創刊号 成城国文学会 一九八五・三)
- (46) 注(15) 三六三頁
- (47) 秋山公男『『こころ』の方法と構造』(『日本文学』第三〇巻第五号 日本文学協会 一九八一・五 七八頁)
- (48) 注(47) 八一、八二頁

- (49) 注(19) 一一〇頁
- (50) 注(37) に同じ
- (51) 注(9) 二八〇～三二五頁
- (52) 仲秀和「漱石『こゝろ』研究(三)——昭和四十年代の研究を巡って——」(『日本文芸研究』第三七卷第四号 関西学院大学日本文学会 一九八六・一 五三頁)
- (53) 注(52) に同じ
- (54) 注(7) 二二八頁
- (55) 注(44) に同じ
- (56) 注(45) に同じ
- (57) 木股知史「夏目漱石『こゝろ』」(『国文学 解釈と鑑賞』第五八巻第四号 至文堂 一九九三・四 二二五頁)
- (58) 例えば、中村直子「『こゝろ』試論」(『東京女子大学紀要「論集」』第四四巻第一号 東京女子大学学会 一九九三・九 三三～五六頁) に議論がある。
- (59) 石原千秋「『こゝろ』論の彼方へ」(『漱石研究』第六号 翰林書房 一九九六・五 一五六～一五七頁)
- (60) 注(59) 一五七頁
- (61) 秦恒平「『先生』はコキユではない。」(『ちくま』第一八九号 筑摩書房 一九八六・一二)
- (62) 小森陽一「『こゝろの行方』(『成城国文学』第三号 成城国文学会 一九八七・三)
- (63) 石原千秋「制度としての『研究文体』」(『日本近代文学』第三七集 日本近代文学会 一九八七・一〇)
- (64) 三好行雄「展望・国文学——近代・現代——」(『国語年鑑 昭和六十一年』秀栄出版)、「三好行雄「(先生)はコキユか」(『海燕』第五巻第一号 福武書店 一九八六・一一)、「三好行雄「ワトソンは背信者か——『こゝろ』再説——」(『文学』第五六巻第五号 岩波書店 一九八八・五)
- (65) 注(15) 三五四～三五五頁
- (66) 浅野洋「変身、物語の母型——漱石『こゝろ』管見——」(佐藤泰正編『文学における変身(梅光女学院大学公開講座論集 第三二集)』笠間書院 一九九二・一二 七四～七五頁)
- (67) 紅野謙介「小森陽一氏の二著をめぐって——ユートピアの彼方へ——」(『媒』第五号 『媒』の会 一九八八・一二)
- (68) 渥見秀夫「記憶と血からの自由——漱石『こゝろ』の妻について——」(『季刊 子規博だより』第七巻第一号通巻二四号 松山市立子規記念博物館 一九八七・六 八～一一頁) も秦恒平「戯曲『こゝろ』(湖の本2 一九八六・九)と小森陽一『こゝろ』を生成する心臓」(注(44))を高く評価する。
- (69) 清水良幸「夏目漱石『心』——『静』の実像をめぐって——」(『近代文学 注釈と批評』第二号 東海大学注釈と批評の会 一九九五・五 六六～九二頁)、佐藤泰正「『こゝろ』をどう読むか——テクスト論的読解へのひとつの問い——」(『日本文学研究』第二九号 梅光女学院大学日本文学会 一九九三・一一 一〇五～一一六頁)、田中実「『こゝろ』という掛け橋」(『日本文学』第三五巻第一二号 日本文学協会 一九八六・一二)、平岡敏夫「『こゝろ』論盛行と『こゝろ』——発端として的小森・

- 石原論文と紅野論文より——(群馬県立女子大学国文学研究」
 第一七号 群馬県立女子大学国語国文学会 一九九七・三一)
 一二頁)、盛忍『漱石「こころ」論 変容する罪障感』(作品社
 二〇〇二・一〇)
- (70) 仲秀和『漱石「こころ」研究史(七)——昭和六十年代以降
 の研究を巡って(1)——』(「文化研究」第八号 樟蔭女子短期大学
 一九九四・九 一七〇三三頁)は「昭和六十年代はじめの『こ
 ころ』論争以後、数多くの『こころ』論が生れたが、その背景
 に「文学研究の方法を問う」という問題がある。」とし、「この
 時期、「語り」に注目した論の多いのが特色で、次に、「静」「K」
 といった人物像、「遺書」の意味に言及した論が目立つ。」(一七
 頁)とまとめている。
- (71) 小林和子『漱石「こころ」について——女性像を視点にして』
 (「茨城女子短期大学紀要」第一五集 茨城女子短期大学 一九
 八八・六 五五頁)
- (72) 注(71)に同じ
- (73) 注(66)七五頁
- (74) 注(66)七六頁
- (75) 注(74)に同じ
- (76) 注(66)七七頁
- (77) 小森陽一『「こころ」を生成する『心臓』』(「成城国文学」創
 刊号 成城国文学会 一九八五・三三)、小森陽一「私」という
 (他者)性——『こころ』をめぐるオートクリティック——(「文
 学」第三巻第四号 岩波書店 一九九二・一〇)、小森陽一『「こ
 ころ」における同性愛と異性愛——「恋」と「罪悪」をめぐる
 ——』(小森陽一、中村三春、宮川健郎編『総力討論 漱石の『こ
 ころ』 翰林書房 一九九四・一)
- (78) 羽鳥徹哉『小森陽一氏の『心』論について』(「日本文学」第
 四三巻第九号 日本文学協会 一九九四・九 五七頁)
- (79) 同様の疑問は西垣勤『作品の読み方について』(「近代文学
 研究」第一〇号 日本文学協会近代部会 一九九三・四 四五
 頁)でも、「こういう種類の一つの想像で、論理を一方にだけ展
 開することが、小森氏、石原氏には多すぎるのではないか。」と
 いう形で提出されている。
- (80) 羽鳥徹哉『漱石の「こころ」について』(「成蹊大学文学部紀
 要」第三〇号 成蹊大学文学部 一九九五・一 七五〇一〇二
 頁)
- (81) 古賀康人『続「こころ」の可能性』(「帝京国文学」第六号
 帝京大学国語国文学会 一九九九・九 四三二〜四四八頁)
- (82) 飯田祐子、石原千秋、小森陽一、関礼子、平岡敏夫「座談会
 『こころ』論争以後』(「漱石研究」第六号 翰林書房 一九九
 六・五 一五六〜一九一頁)
- (83) 浅田隆『漱石「こころ」論・素描——「静」の「純白」をめ
 ぐって——』(「枯野会編『枯野(日本文学研究誌)」第一〇号 南
 方社 一九九三・六 三〇〜四六頁)
- (84) 注(79)に同じ
- (85) 石原千秋『テクストはまちがわれない』(「漱石研究」第六号
 翰林書房 一九九六・五 一四八〜一五五頁)

- (86) 浅田隆「テキストはまちがわれないか？」(『漱石研究』第七号 翰林書房 一九九六・一二 一八六〜一九七頁)、浅田隆「『こゝろ』解釈をめぐる疑義——「差異化」という視点——」(『論究日本文学』第六五号 立命館大学日本文学会 一九九六・一二 一〜九頁)、石原千秋「それでも「テキストはまちがわれない」(『漱石研究』第七号 翰林書房 一九九六・一二 一九八〜一九九頁)
- (87) 石井和夫「最近の漱石研究から21世紀の漱石研究を見通す」(『国文学 解釈と教材の研究』第四二巻第六号 学燈社 一九九七・五 一三七頁)
- (88) この傾向は小森陽一「書評 戸松泉著『小説の(かたち) (物語)の揺らぎ——日本近代小説「構造分析」の試み——』」(『漱石研究』第一五号 翰林書房 二〇〇二・一〇)でもはっきりと確認できる。
- (89) 注(61)に同じ
- (90) 注(64)に同じ
- (91) 大川公一「善悪の彼岸過迄」としての「こゝろ」(『成城国文学』第二号 成城国文学会 一九八六・三)
- (92) 田中実「『こゝろ』という掛け橋」(『日本文学』第三五巻第一二号 日本文学協会 一九八六・一二)
- (93) 高田知波「『こゝろ』の語法」(『有精堂編集部編「日本の文学」第八集 有精堂 一九九〇・一二)
- (94) 押野武志「『静』に声はあるのか——『こゝろ』における抑圧の構造」(『季刊文学』第三巻第四号 岩波書店 一九九二・一〇)
- (95) 斉藤英雄「こゝろ 研究の現在」(『国文学 解釈と教材の研究』第三九巻第二号 学燈社 一九九四・一 一五八〜一五九頁)
- (96) 石原千秋「教室の「こゝろ」」(『日本文学』第四二巻第七号 日本文学協会 一九九三・七 五三頁)
- (97) 注(96)に同じ
- (98) 赤間亜生「(未亡人)という記号」(小森陽一、中村三春、宮川健郎編『総力討論 漱石の『こゝろ』』 翰林書房 一九九四・一 一一七〜一四〇頁)
- (とくながみつひろ) 本学大学院博士後期課程
宮崎国際大学比較文化学部専任講師